

次の文章を朗読しなさい。

「ねえ谷口くん、きみは……きみは何なの？」

「えっ？ 何って？」

「あたし、ずっと見てた。前からずっと。野球部の雰囲気が変わったよね。変えたのは谷口くん、あなたでしよう？」

谷口が首をひねった。

「いや、違うと思うよ。だってオレ、1年だよ」

——なるほど。自覚なしってことか。

でも、あきらかに野球部は変わった。その原因となったのが谷口たにくちの存在そんざいであることは、間違まちがい

ない。
明日香あすかは、ずっと気になつていた。まだ1年生である谷口たにくちがどうやって野球部を変えたのか？
部の雰囲気を変えてしまうほどのパワーは、いったいどこから来るといえるのか？ 谷口たにくちには悪いが、こうして話をしていても、谷口たにくちにそんなパワーがあるとはどうも思えない。

「ねえ教えて、谷口くんは、いったい何をしたの？」

「何って……大好きな野球をしているだけだよ」

「……」

明日香あすかは、ポカンとしてしまった。

——野球が好きだから。

なんとというシンプルな答えだろう。

ゾクリと鳥肌とりはだが立った。それと同時に、なぜだか笑えてきた。

「そっか、そうだよ。野球が好きなんでもね」

クスクスと笑いながら明日香あすかは言った。

「あの……オレ、家に帰ってからも自主練するから、もういいかな？」

谷口たにくちが話を切り上げるように、ペダルに力を入れた。

「ねえ谷口くん、待って！」

明日香あすかは慌あわてた。

言い方が悪かった。笑いながら言ったせいで、バカにされたと思つたのかもしれない。

自転車の前に回り込み、強引ごういんに谷口たにくちを引き留める。

自分の感動をうまく説明できない。でも、伝えたいことがたくさんあった。

「ありがどう、勉強べんきんになった。あたしも好きなことに一生懸命いっしょうけんめいになる。たつた今決めた。谷口たにくちくんのおかげだよ。ありがどう」

谷口たにくちがとまどつた表情へいしやうをしている。

谷口たにくちの反応はんおんも、当然たうぜんといえは当然だ。明日香あすかは、心に浮うかんだことを、ほとんどそのまましゃべつただけだ。谷口たにくちには、明日香あすかが何なにに悩み、これから何をしようとしているかなんて、何一つわからないだろう。

自分の正直な気持ち。たつた今、下した決断。そこに至る過程いたや感情を説明しただけなら、いくら時間じかんがあつても足りない。だから、全部をすつ飛ばして、ただ自分の気持ちだけを正直に話したのだ。

谷口たにくちに伝わらないのは当然だ。

「……えっと、オレ、帰るから」

「うん」

もう引き留めることはできなさそうだ。

明日香あすかは、体を横よこにどけて、谷口たにくちに道を譲ゆずつた。ペダルを踏み、谷口たにくちが走り出す。

明日香あすかは、そんな谷口たにくちの後ろ姿うしろすがたを見送つた。